

## 10. 学生相談の最近の傾向

金沢大学保健管理センター 木場 深志

このところ、学生相談室に自発的に来談する学生数は減少傾向にある。教官や事務官からの紹介、病院からの紹介、親に連れられて来た者等を除いて、全く自分の意志だけで来談したもののだけを取り上げて、年度ごとの件数（新規受付件数。のべ件数ではない）を示すと第1表のようになる。昭和54年度までは30件台であったものが、59・60年度には10件台に減少しているのがわかるであろう。最近の相談

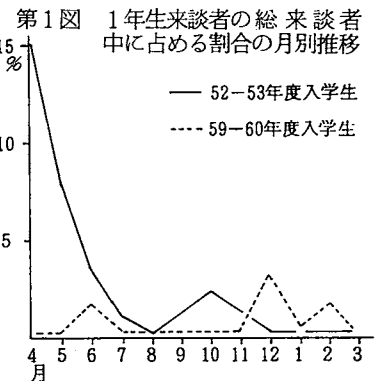
第1表 年度別自発来談者数

年度	52	53	54	55	56	57	58	59	60
件数	31	39	33	20	19	31	16	13	21

室活動の傾向として、相談室内での面接から健康管理思想・知識の普及教育活動へと主

力が移り、来談の呼びかけや宣伝を積極的には行わなくなったことも一因であろうが、もう一つ、1年生の来談が減少したことが、全体の件数を減らしているようである。従来、4、5、6月の3ヵ月間は1年生の来談者が多かった。たとえば昭和52年度の自発来談者31人のうち、4～6月に来談した1年生は11人であったが、一方60年度のこの期間に来談した1年生はただ1人であった。この様子をグラフで示すと第1図のようになる。

第1図は総来談者（紹介によるもの等を含めた利用総件数）に1年生が占める割合を月別に示したものである。太線は52、53年度入学生、点線は59、60年度入学生についてのものである。％を算出するには1年度分では数が少ないため、2年度分を合計した。また、52、53年度は共通一次試験実施直前であり、59、60年度は在学生の大部分が共通一次世代に入れ替わったと考えられる年度である。図を見てわかる通り、52、53年度入学生にみられる年度頭初のピークが59、60年度には消失し、大まかにみれば年度末近くになって来談する者が増えている。



このような1年生の来談者減少とともに、卒業期にある学生（4年生および大学院2年生が主、卒業を控えて留年している者も含む）の来談が増加する傾向もみられる。この様子を第2図に示す。

第2図は、来談した1年生（実線）および卒業期学生（点線）の、総来談者数に対する割合を年度別に示したものである。1年生の割合が54年度あたりから減少し、卒業期学生の割合が増加して、今では逆転してしまっているのがみられる。％であるから当然、一方が増加すれば一方が

減少するという性質のものであり、念のために実数で示せば、52、53年度から59、60年度への変化は、1年生が28から4への減少、卒業期生が7から11への増加である。従って第2図に見られる傾向の変化は、1年生の減少に負うところが大きいと言えるであろう。

これらのことから、所謂「5月病の消失」が本学においても生じていると思われる。しかし、卒業時期になってはじめて来談する学生と面接すると、実際には入学当初から、「なんとなく勉強に乗らない」「自分が本当にやりたいことをしているような気がしない」等のことばで表わされるような、

漠然とした不満足感ないしは不安定感を持っていたことが伺えることが多い。そしてその結果、「勉強はしたし就職も内定したが、何か大事なことを大学でやり残しているような気がする」「どういう職業が自分に向いているのかわからない」「できれば留年してゆっくり考えたい」といった訴えとなって来談に至るケースが目につく。おそらく、入学当初の不安定感が「悩み」として訴えうるほどの明確な形にならないまま時がすぎ、卒業・就職という具体的現実的な自己決定の場に直面して初めて「自分は何者か」という問いとして意識化あるいは概念化されてきたものと考えられる。全くの仮説であるが、「大学生になる」ということが、「今までとは異ったやり方を要求される場面」としては扱えられておらず、「自己の役割の変化」を必要としなくなりつつあるのかも知れない。

第2図 1年生および卒業期生の総来談者に対する割合の年度別推移

